

今回は、「唐古・鍵遺跡」(以下、遺跡という。)をテーマに選びました。今回は、昭和12年1月から3月に行なわれた第1次調査を中心に遺跡の学史的意義を確認したいと思います。報告書は、「大和唐古彌生式遺跡の研究」として昭和18年に刊行されています。

1 地形など

(1) 地形

報告書では、調査地(唐古池下層)は、奈良盆地の最も低湿部分にあり、旧初瀬川が盆地中央部の湖沼帯に流入する付近に作り上げた三角州に立地し、遺跡の中心部としています。

これは、今日の地形観と異なっていて、現在は、旧初瀬川の堆積によって形成された自然堤防(微高地)に相当すると考えられています。

また、注目すべきは、遺物の層序を明らかにしていて、上層部に作られた竪穴状の凹所内を充填する黒色土層が遺物包含層と特定しています。これは、唐古・鍵遺跡のみならず近畿の弥生遺跡に通有するキー層となっています。

(2) 環境

調査から、森林に生息する鹿・猪などの哺乳動物類の遺骸が多く出土し、縄文貝塚と同様の構成である点を根拠に、当時の奈良盆地周辺の山々は今日よりも一層森林に覆われていたと評価しています。しかし、今日と違って、花粉分析などの調査は未だなく、専ら木器の木質鑑定を通じて植生分析がなされています。木製利器類の材質は、落葉照葉樹が多く、針葉樹は少ないと報告されています。報告された樹種をみると、多寡が不明ですが二次林が含まれています。また、種子果実類では、モモ・クルミが多く、トチノキ・クリなど多種類の食用果実が報告されています。そこには、低湿地を好むヒシの実があり、ミゾソバの種子とあわせ、付近に低湿地の存在を推定しています。

このように、遺跡周囲には樹木が多く、建設材などに活用され、また果実が食用に利用されていたと推定しています。これは、その後の自然化学分析結果と相違ない報告です。

2 遺構

遺構は、中・南・北の三つの砂層と大小百数十基の竪穴のみです。

(1) 砂層(自然流路)

出土土器から、中央砂層(畿内第1様式を中心)、南方砂層(畿内第1様式を含み第II様式中心)、北方砂層(第III・IV様式中心)が検出されました。旧初瀬川と思われる流路は、唐古池と鍵池を結ぶ線を網の目状に走行していたとされています。

(2) 竪穴(土坑)

特に、重視されるのは、竪穴です。発見例の多い竪穴は、第I様式期の隅丸の矩形(短辺1.6m以上)で、上部の屋蓋の構造とされる住居関連遺物が出土し、さらに内部には日常使用の器物が遺存し、火を使用した炉跡があることから竪穴住居遺構としています。また、第V様式の竪穴は小型の壺形土器のみが出土し、貯蔵用の倉庫施設とし、この時期の住居は、絵画土器(梯子のある高床家屋)を根拠に高床式を想定しています。

但し、竪穴の評価について、竪穴内の滞水を前提に木器の貯蔵穴とし、小規模の竪穴を井戸とする見解があります。留意したいのは、竪穴を次に述べる土器編年と関連づけ集落動向を解明している点です。中央・南方砂層を中心としたI様式(竪穴数27)、II様式(8)、さらに北方砂層を中心としたIII様式(3)、IV様式(6)、V様式(10)は、集落内の移動を示しているとしています。

3 遺物

(1) 弥生土器

遺跡からは、縄文土器を含め多様な土器が出土しています。報告書では、小林行雄先生の様式論をもとに弥生土器を五様式(唐古編年)に分類しています。土器を器形・装飾・製作の方面で分類し、同一堅穴から出土する土器間の変化を一様式と捉える前提で編年したものです。

その編年に基づいて遺構・遺物が整理され、相対的な年代の考証がなされています。また、土器の用途に応じた器形を区別し、土器の分化発達の過程を明らかにしています。

最近では、放射性炭素年代測定法や年輪年代測定法が重視されますが、唐古編年(畿内編年)は、現在でも重視される標準化された土器編年で、これにより弥生時代の「時間軸」が確定できました。第1次調査の重要な成果物といえます。

(2) 木製耕具

遺跡からは、第1様式期を中心に、木製耕具が多量に出土し、さらに多量の粃殻や焼米や脱穀具の堅杵などが出土し、弥生時代が水稻耕作に立脚する文化であることを明らかにしました。第1次調査の最大の成果といえます。

木製耕具としては、平鋤・諸手鋤・馬鋤・鋤(未成品を含む)などが出土しています。その形態の違いは、使用の目的の変化に対応したものと、それを日常生活で稲作農耕が重きを成していた証しと、さらに豊富な焼米・粃殻の出土がそれを裏付けるものとしています。

(3) 石器

調査では、豊富な石器類(447点)が出土しています。サヌカイトを石材とした石鏃・石槍などの打製石器(59%)、石包丁(25%)、石斧類(8%)とに分類され、太型・小型蛤刃石斧・扁片刃石斧・柱状片刃石斧など半島系の磨製石器も含まれています。石包丁や磨製石斧に使用されているのは、閃緑岩や緑泥片岩です。また、石製・土性紡錘車も出土しています。

(4) 銅鉄の金属製利器

報告書では、銅細線を接合用に使用した高杯形木器(Ⅰ～Ⅱ様式土坑出土)と鉄錆の付着した鹿角製刀子把の出土を根拠に、弥生時代は金属器の使用を過小に評価してはならないと力説しています。金属器の発見は、弥生期から古墳期の移行のプロセスを、鉄器を使用した生産力の高まりや武力の強化に求める根拠とされたもので、鉄を背景とした弥生史観を築いた重要な出土品です。現在もその考えを踏襲する根強い意見がありますが、奈良盆地の鉄の保有は少ないとみる意見が大勢となっています。

4 特別史跡

以上のように、第1次調査は、その後の弥生文化の研究の礎を築いたもので、10年後の登呂遺跡の発掘に連なるものです。

現在、唐古・鍵遺跡は、国史跡に指定されています。国史跡は、歴史上、学術上の価値が高いものとして、現在1700件ほど指定されています。特別史跡(遺跡の国宝)は、そのうち特に重要なものとして62件が指定されています。登呂遺跡、吉野ヶ里遺跡、原の辻遺跡などが弥生時代の特別史跡です。第1次調査の学術的価値を考慮すると、遺跡は特別史跡に相応しいと考えます。特別史跡指定化は、今後の課題と思います。

土器様式

(視点)

- 1 セット論：土器の器形（壺形・甕形・鉢形・高杯形）をセットで捉える。＝土器様式
甕（頸と胴部の横巾が全体横幅の3分の2以上）・・寸胴（広口）
壺（頸と胴部の横巾が全体横幅の3分の2以下）・・すぼみ口
深鉢（鉢形の高さが3分の2以上）底幅と高さの比
浅鉢（鉢形の高さが2分の1から3分の1くらい）
皿（鉢形の高さ3分の1以下）
高杯（高さが3分の1くらいの台がつく）
- 2 編年論：土器様式を地域・時間的に整理するため、製作・形態・文様・胎土を編年作業
- 3 社会論：土器の出土状況や用途を確認し、地域・時期毎の経済、技術、社会組織、文化、交流等の復元資料
 - (1) 唐古第一様式（前期）
 - ・胎土：砂粒を多く含む
 - ・技法：表面を研磨し、ほとんどが黒褐色乃至灰茶色（表面に黒褐色の塗抹物）
 - ・文様：篋描（へらがき）文・凸帯文が多く、篋描きを境に段（一方を削る）。
 - ・器面：赤色顔料（精製の土器）に彩文も多い。
 - ・器形：壺・甕・鉢・高杯・大型甕・壺蓋・甕蓋
 - (2) 唐古第二様式（中期）
 - ・文様：櫛描き文を多用する(特徴)。
 - ・甕形土器は粗い刷毛目状の仕上げ、
 - ・器面：甕形土器以外の器面は、盛んに研磨
 - ・胎土：砂粒を含む
 - ・技法：焼成が黒褐色で、甕形土器以外は丁寧な研磨 無文が多い。
 - ・器形：壺・細頸壺・無頸壺・甕・鉢・高杯・壺蓋
 - (3) 唐古第三様式
 - ・胎土：良質の粘土に細かい砂
 - ・技法：薄く作る、回転台利用(?)。仕上げに、刷毛目ないし篋削りの技法
 - ・文様：櫛描き文が好まれた時期
 - ・器種：壺・細頸壺・無頸壺・水差し形甕・大型鉢・大甕・台付鉢・高杯・壺蓋。各種の器に脚台をつける傾向
 - (4) 唐古第四様式
 - ・胎土：良質の粘土に細かい砂
 - ・技法：第三様式に比較し厚め。器面の仕上げに刷毛目の外に叩き目を用い、篋削りや篋描きもある。焼き上がりが黒い色調
 - ・文様：凹線文が多い。壺形土器に原始絵画が篋書き
 - ・器種：壺・水差し形壺・甕・鉢・高杯に大型器台・台付無茎壺が加わる。
 - (5) 唐古第五様式
 - ・胎土：あまり良質でない
 - ・技法：成形は、輪積みと巻上げ法で、粘度帯の継ぎ目が残り、焼成も軟質で粗雑。表面の仕上げに刷毛目、篋磨き、叩き目を用いる。器体から飛び出した平底。製作は、全体に粗雑で焼成も軟弱。
 - ・文様：篋描き・櫛描き・竹管文・浮文等の施文法のセブン法幾何学的デザイン
 - ・器種：甕・鉢・高杯に長頸壺が盛んに作られた